いちご薄書

植嶋由衣

ICHIGO HAKUSHO

UESHIMA YUI

読売

いちご薄書

ICHIGO HAKUSHO

UESHIMA YUI

植嶋由衣

読売新聞社

視覚障害その他の理由で活字のままでこの本を利用出来ない人のために、営利を目的とする場合を除き「録音図書」「点字図書」「拡大写本」等の製作をすることを認めます。その際は著作権者、または、出版社まで御連絡ください。

いちご薄書

著者——植嶋由衣　西川のりお　野村若葉子
長谷川寿子　湊　崇暢

編集人——青羽孝雄
発行人——黒埼精三
発行所——読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇－八〇五五
大阪市北区野崎町五の九　〒五三〇－八五五一
北九州市小倉北区明和町一の一一　〒八〇二－八五七一
名古屋市中区栄一の一七の六　〒四六〇－八四七〇
印刷所——大日本印刷株式会社
製本所——大口製本印刷株式会社
第一刷　二〇〇〇年（平成十二年）二月十日

© 2000, Yomiuri Shimbun-sha
Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

第20回読売「ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞
カネボウスペシャル入賞作品集『いちご薄書』　目次

大賞　いちご薄書　植嶋　由衣　5
優秀賞　オカン　西川のりお　67
入選　狂言の国・詩人の国　野村若葉子　117
入選　伴走夫婦　長谷川寿子　169
入選　いくつもの海を越えて　湊　崇暢　221
掉尾を飾る作品　三好　徹　273
選考経過　277
入賞者一覧　279

装画　橋本　淳子
装幀　中島かほる

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

いちご薄書

第20回読売「ヒューマン・ドキュメンタリー」大賞
カネボウスペシャル
入賞作品集

大賞

いちご薄書（はくしょ）

植嶋由衣（うえしまゆい）

うえしま　ゆい　昭和57年7月奈良県生まれ。現在、兵庫県内の通信制高校に在学中。家族は両親と二人の妹の五人。

第1話　体育祭

母が妊娠に気付いたのは、わたしが中学一年の体育祭のころだった。
（もうすぐ四十やのに何考えてんねやろ）とあきれながらもまじめくさったわたしは、初めての体育祭のことで頭がいっぱいだった。学校全体が、赤青白の三つの団に分かれ、競技と応援合戦の総合得点を競う。わたしは青団で夕方遅くまで応援の練習に励んでいた。ふざける友達を横目に頭の中は応援のフレーズであふれていた。
「青団の応援かっこいいねんで。絶対見に来てや」
と台所に立つ母にしつこく話していた。母はつわりでゲーゲーしながらも、
「分かったって。絶対見に行くから」
と約束してくれた。でも（頼むからグラウンドではゲーゲーせんといてな）と思っていた。
体育祭当日は、いつになく早く目が覚めた。カーテンのすき間から外を見ると、わたしの高ぶる気持ちとは裏腹に、あいにくの曇天だった。それでも、（優勝するぞ！）と一人で燃えていた……。台所をのぞくと、案の定というか当然というかお弁当はできていなかった。その代わりに、
「ママ、しんどいねん。お昼の時間までにはお弁当作って持っていくから心配せんと行ってき」
という声がフトンの中から聞こえた。
（ほんまやろなあ……）
「遅れんと来てや。ちゃんと応援見てや」

こう念を押しながら、そそくさと朝ごはんを済ませて家を出た。こんなに張り切ってるけど、わたしが出場するのは、リレーや騎馬戦など花形種目ではなく、なぜか綱引きと大縄跳びだけ……。大縄跳びは、自ら縄を回したいと名乗り出た。一年から三年のほとんどのグループが男子同士で回す中、跳ぶことに自信のないわたしは（もしひっかかったら……）と思う恐怖心と闘うよりは、重い縄を力いっぱい回すほうが性に合っていると思った。

しかし、一本の縄で四十人近くが一斉に跳ぶんだから〝たかが大縄、されど大縄〟で、結構難しいし、それなりに力もいる。それを承知で名乗り出たんだから、（男子に負けないように回さないとみんなに迷惑がかかる）と必死だった。瞬発力はあっても持久力のないわたしにとって大縄を回すのはとてもきつかった。でも、（跳ぶよりは気が楽だから）と自分に言い聞かせ、どんなにしんどくてもこれをやり遂げるぞと決意を固めた。

「一回目、よーい」

「いっせーのーで！」

わたしは精いっぱい大きな声を出した。

「一回！」

「二回！」

「三回！」

「ヨー……」

跳べたのはたったの三回……。

「回し方が悪いんやんかぁ」

「もっと大きく回せよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

とか言われ、ムッとしながらも貧血でフラフラだった。
「二回目、よーい！」
「えー、もうやるの！」
立とうとしたものの、立ちくらみで目の前は真っ暗。何も見えずフワフワと宙を浮いているようだった。
（もうダメ！）と思ったけど、相手が縄を回し始めたので仕方なく半分引き回されるような格好になってしまった。
「一回！」
「二回！！」
「三回！！！」
「四回！！！！」
「五回！！！！！」
「六か……」
二回目は五回跳べた。他のグループは十回とか、多いところは四十回以上跳んでたけどわたしは満足だった。練習の時でもめったに五回なんて跳べなかったんだから、ほんとに大満足だった。
疲れてよろめきながら、砂だらけでほこりくさい縄と手にできた五つのまめとを代わるがわるながめ、一人青春していた。雲の切れ間から漏れた光を浴びながら〝一つの大役〟を無事やり終えた達成感に顔を紅潮させ、大満足で退場門をくぐった。
席に戻ってホッとしたのもつかの間、
「綱引きの選手は、今すぐ入場門に集まりなさい」

と場内アナウンス。わたしは綱引きの選手という言葉の響きに感動を覚えた。
「オーエスのエスで引こう」
とか、
「腰を低くして絶対立たない」
などといろいろ申し合わせ、定位置についた。
「ヨーイ」
「パーン！」
ピストルの音と同時に、
「オーエス、オーエス」
と叫びながら満身の力を込めて引っ張った。両チームとも譲らず、お互い必死で引き合った。
次第に疲れてきていつの間にかジリジリと引きずられていた。
（もうだめだ……）とあきらめそうになったその時、真っ青の団旗を抱えた団長が登場。団長が、
「みんな、がんばれ！！　オーエス、オーエス」
と言って応援してくれるとアラ不思議！　もう相手チームの方にほとんど傾いていた勝ち負けを決める旗は、少しずつ少しずつ青団の方へ倒れてきてくれたのだった。
「ヤッター」
「勝ったゾー」
「しんどー」
口々に言いながら、まるで小学生に戻ったみたいにピョンピョン跳びながら歓声をあげた。
二本目。

（あと一回勝てば午後の決勝に進めるんだ！）と気合いを入れ、場所を交代してピストルの音を待った。
「がんばろうな」
「うん」
友達と励まし合った。
「パーン！」
引いたと思った瞬間ものすごい力で引っ張られていった。必死で負けまいと力を振り絞った。でも今回ばかりは団長がどんなに叫んでもだめだった。結局、靴にかわいそうな思いをさせただけだった。あっという間に一勝一敗となり、疲れ果てたわたしたちは、三本目、あっさりと負けてしまい最下位が決定した。そしてわたしたちの午後からの決勝進出はならなかった。
クタクタに疲れて応援席に戻ってお茶を一口飲んで、
「あーあ、体操服どろんこになってしもたわ」
そう言いながらふと周りを見回して気付いた。今、綱引きをしてきたというのにみんなの体操服はあまり汚れていなかった……。服の汚れと頑張りが比例するとまでは思わないけど、みんなの白い体操服とわたしの救いようもないほどに真っ茶っ茶に汚れた体操服とをつい比べてしまう……。
（もしかして、ほんとにもしかして死にものぐるいで引っ張っていたのはあたし一人だったのかも……）そう思わずにはいられない光景を見、あまりのむなしさに、さすがのわたしも怒りというよりかは、一人浮いている恥ずかしさが先に立ち、たまらなくなって、着替えをするためにトイレに駆け込んだのだった。
「何なんよ、もう」

とつぶやきながら……。
トイレから出るとさっきから今にも泣き出しそうだった空からポツリポツリと雨が落ちてきた。
（お天気まであたしの気持ちを分かってるんやなあ……）と思いながらしばらく空を見つめていた。
そんなブルーなわたしも友達や母や妹とお弁当を食べ、気を取り直した。そして、
「次、応援合戦やから来てや」
と念を押して早々と応援席に戻った。競技で一番得点の低い青団が優勝するためには、応援合戦で頑張るしかない。そしてわたしは逆転を信じていた。
（青団の応援、一番かっこいいもん、大丈夫）と本当に自分の団の応援が気に入っていた。
五分間の応援はあっという間だった。わたしたちはVictoryという文字を掲げ堂々と退場した。
（どの団よりもたくさん練習しただけあって、ミスもなく大成功だ！）と少なくともわたしは思った。
そして、ワクワクしながら結果を待った。
結果はなんと！　最下位。信じられなかった。ものすごく悔しかった。あんなに良かったのに……。
雨が降っても毎日夕方遅くまで練習したあの執念と努力はなんだったんだろう。わたしの気持ちはまるで燃え尽きた灰のようだった。
午後からは出番がないのですごく暇だった。騎馬戦は青団が優勝したのでみんな盛り上がっていたけど、わたしは一人沈んでいた。そして、最後の全校生徒のフォークダンス。女子の間では大変盛り上がっていたけど、これもわたしはブルー。どうってことなかった。綱引きも応援合戦もだめだった。そう考えている間に雨がひどくなり、閉会式も片付けもなしで解散となった。その足で家に帰って息を切らしながら母に尋ねた。
「応援、どうやった？　よかったやろ！」

「それがな、見られへんかってん」
「えっ」
「話に夢中になってて気いついたら雨も降ってきたし……」
「……」
返す言葉も見つからなかった。どうしてママっていつもこうなんやろう……。あんなに念を押したのに……。とてもショックだった。
こうして初めての体育祭はあっけなく幕を閉じた。
何日か過ぎて、体育祭のショックから少し立ち直ったころ、母が現像した写真を持ってきた。
そしてこう言った。
「ちょっと見てみ、かわいく撮れてるわ」
写真をのぞき込んで目を疑った。それは汗とほこりにまみれながら体育祭で青春しているわたしではなく、二歳になる妹がグラウンドで〝ピース〟ってポーズしている写真だけだった。そう、わたしの初めての体育祭の写真はその一枚だけだった。
そして母はわたしを慰めているつもりなのか、
「来年はちゃんと見にいくから」
といつもの調子で笑った。

第2話　とある病院で

母はすでに妊娠七か月になっていた。父もわたしも、
「もう年やねんからはよ病院へ行き」
と心配するのに本人は、
「お産なんか病気とちがう」
と言って、なかなか病院へ行こうとしなかった。
「どうもないのにお金払うのもったいないし、それにええ年して格好悪いし……」
それもそうだろう。周りのママたちは一回りほど若いのだから……。
「でもいまどきの病院はきちんとコンピューターで管理されてるから、せめて、入院予約だけでもしといてもらわなこっちが迷惑や」
と父と二人でさんざん説得した。母はほとんどのことはすごくアバウトであまりこだわらない。なのにこれはと思うと、極端と思えるほどのこだわりを見せる。ここ数年は、添加物の多い食品を敬遠し梅干しやおみそまで手作りするほど食にこだわっている。
〝食べるものが子供をつくる〟
〝健康な体に健全な精神が宿る〟
とか言って市販の加工食品を徹底的に避けている。
「〝コン〟の付くもの、土の中にあるものがいいの」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com